賀　正

天文界

第189號（第 17 巻）　（昭和12年）　1 月 號

天文界の新時代來らん

（巻　頭　言）

多忙を極めた1936年を見送つて，今吾等の眼前には輝やかしい1937年が來らんとしつゝある．久しぶりに火星の歸來や，太陽黑點の超活躍其の他によつて此の新しい年も，天界は賑はうだらうが，尙ほ其れ以外に，永く待たれた大阪プラネタリウムの完成公開と，太陽研究を中心とした生駒山天文臺の創立と，尾ノ道市の郊外にスタートする世界無比の“黃道光研究所”の出現と，――この三つの新しい事件によつて，1937年は我が國の天文學史上に重要のものとして記憶されるのであらう．言ふまでもなく此のプラネタリウムは現代の天文教育設備上の最高峯であつて，殊に人生と關係の深い球面天文學や基礎天文學の最も生き々々した講堂として全東洋に君臨するものであらう．又，宇宙變動の根本原因たる太陽の研究の重要さが，多年の學俗界の要望に應ずる如き機に際會して，こゝに生駒山上に本邦唯一の太陽研究所が出來上ることの喜びは，決して單に京都帝國大學のためのみではない筈である．更に黃道光研究所の出現に至つては，國際天文同盟の遠大なる要望に應ずる邦家の一新設備として祝福と期待との大ならんことを希ひねがうものである．

こうした新時代の開けんとするに當り，亦，我が東亞天文協會が創立以來最初の大改革を其の組織の上に施し，新會長の推戴と共に，責任幹事制を確立し，尙ほ出版，計畫，觀測，事業，教育，經理の6部を新設して，會の目的たる諸事業の理想と實現とに突進せんとする意氣を示すことゝなつたのは，恐らくは全會員が無條件に喜びとする所だらうと思ふ．（山本）